令和6年7月26日発行（毎月1回28日発行）通巻692号

MONTHLY MAGAZINE THE"BUDO"

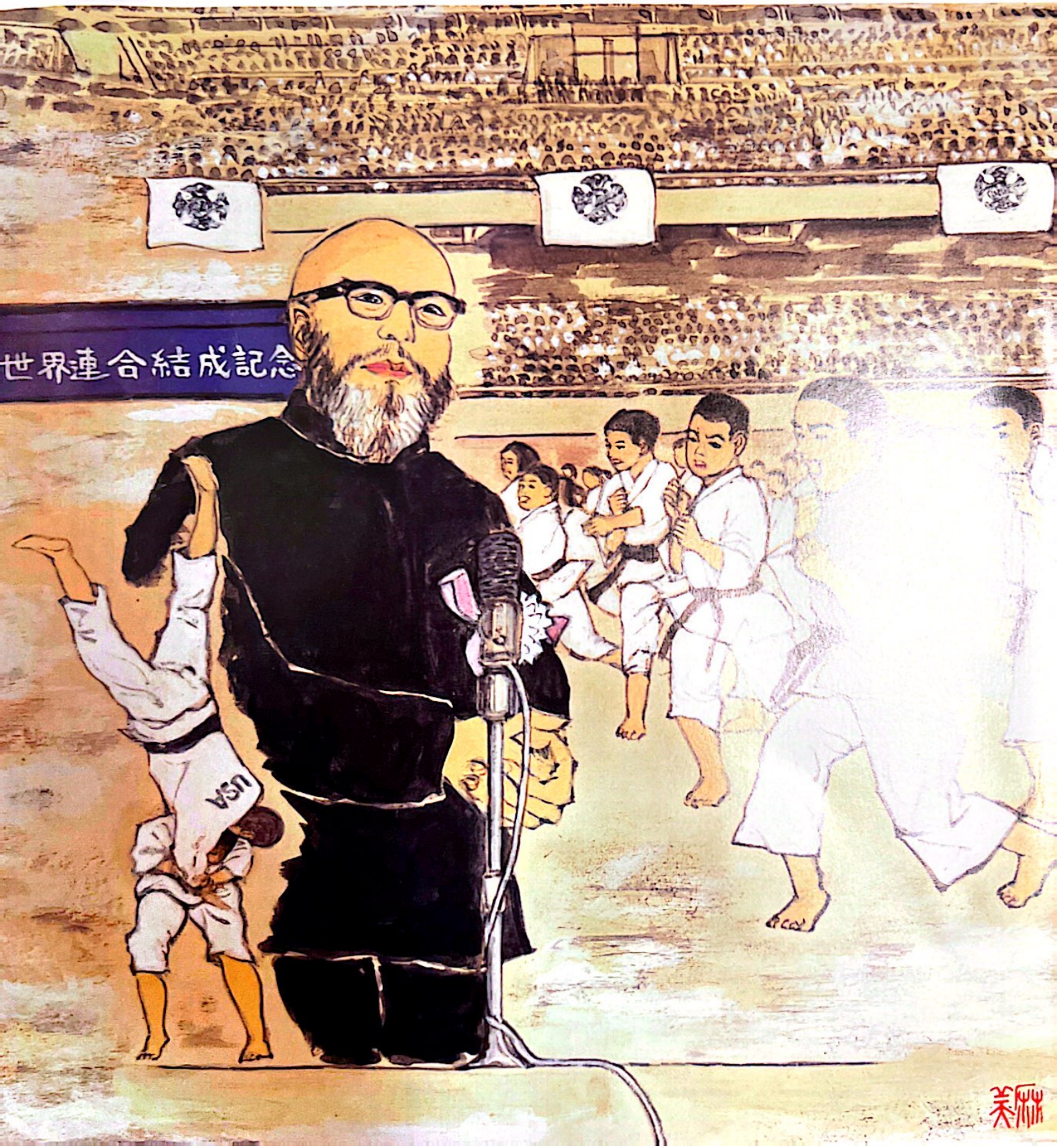
AUG. 2024
8
VOL. 692

月刊 心技体 人を育てる総合誌

武道

巻頭カラー
巻頭リレーエッセイ　内田　樹
武道人の肖像〈佐竹令子〉　たかはしじゅんいち
世界の城塞　若月伸一
武の彫刻　佐々木香輔

好評連載
日本社会の明るい未来のために ―― 安西祐一郎
自己を磨く―武道の地平線 ―― 西平　直
私の修業時代 ―― 柔道　立川克雄
残心の哲学 ―― アレキサンダー・ベネット
武道の可能性を探る ―― 髙橋海有
柳生新陰流兵法―術理と精神― ―― 柳生耕一厳信
私の学術研究発表 ―― 前川直也



シリーズ

武道の可能性を探る

持続可能な剣道に幼児教育のエッセンスを

第184回

台東初音幼稚園園長
真言宗豊山派観智院副住職
髙橋　海有

剣道との出会いと指導者としての原点

東京で初めてのオリンピックが開催された3カ月後の1965（昭和40）年1月、東京の下町と言われている台東区谷中にある寺院の長男として生まれました。祖父は大学、祖母は尋常小学校、父は東京芸術大学音楽学部、母は聖徳大学幼児教育学部でそれぞれ教鞭（きょうべん）を執る教育一家で育ちました。父の影響でピアノやサッカーを習っていましたが、上達が早く仲間と比較して高い自己評価を持っていました。

小学2年生の時にクラスメートに誘われて「谷中道場」に入門し、剣道に出会いました。当時、地域は少年剣士でいっぱいで門下生は小学生だけで100名を超えておりました。習い始めたものの剣道はなかなか上手にならず、部内試合をしても負けてばかりで勝つことは殆（ほとん）どありま

せんでした。しかし何故か剣道が楽しくて、負けてもつらくても剣道が大好きだったのです。

その理由は、指導をしてくださった先生、福本滋彦教士八段（故人）の存在です。稽古指導は厳しかったですが、私の良いところを見つけては言葉を掛けてくださいました。「足捌きが良いから、続けていれば上手になり強くなれるぞ」と、その気にさせる的確な言葉を掛けてくださったその体験が、私の指導者としての原点であることは間違いありません。

先生に憧れて、先生の母校である巣鴨高等学校に進学しました。本格的に剣道に取り組んだのは、そこでの師との出会いでした。剣道を学ぶことの意義と心を教えてくださった佐々木二朗先生「練習は不可能を可能にする」と、心技ともに芸術的な強さを兼ね備えた小川春喜先生「強く美しい剣道」です。二人の師匠との出会いが私を大きく育ててくれました。大正大学では東洋哲学と僧侶になるための宗教学、そして教員になるために学びつつ体育会剣道部で4年間活動しました。卒業後は家業を継承し幼稚園と寺院の仕事に就きました。

幼少年への剣道の効用

私が幼少年の剣道に携わるようになった35年ほど前は、子どもの習い事でスポーツと言えば野球が主でそれほど種類は多くありませんでした。剣道は、小学生以上の会員数は減少傾向ではありながらも一定数の人数がいて、幼児を受け入れていた剣道教室は多くはありませんでした。地元の台東区では私の教室だけが受け入れていました。

実家の寺が経営する幼稚園の仕事で幼児教育について学びました。当時、社会人として求められていたのは、与えられた課題を効率的にこなす能力でしたが、幼児教育の考え方は全く違っていまし

●プロフィール
髙橋海有（たかはし・かいゆう）
1965年生まれ、東京都台東区出身。
大正大学文学部哲学科卒業、巣鴨中学・高等学校非常勤講師、認定こども園台東区立ことぶきこども園初代園長を務める。現在、台東初音幼稚園園長、真言宗豊山派観智院副住職。本務の仕事と並行して昭和63（1988）年、幼児のための「初音剣道教室」を設立、現在は「初音剣志塾」に名称変更し塾長を務める。大正大学剣道部監督を24年間務め、現師範。剣道教士八段。フィンランド・ベルギー・デンマーク・スイス・中央アジアなど、海外の剣道指導に携わる。2020年東京オリンピック・パラリンピック聖火ランナーを務める。保護司として更生保護活動に従事。
妻・4男4女（小学生から大学生）10人家族の父親業に奮闘中。

た。子どもに寄り添い、「子ども主体の協同的な学び」を大切にする考え方でした。小・中学校では2017（平成29）年頃から漸く「アクティブ・ラーニング」として生徒の主体的・対話的で深い学びが始まりましたが、「学び」や「稽古」と言うと先生や指導者が生徒や弟子に一方的に教えて、まさに「与えた課題を効率的にこなさせる」という固定観念があり、幼児教育で大切にするものと両立させることに悩みながら試行錯誤して稽古指導する毎日でした。

幼稚園では主体性を大切にする園の方針とは裏腹に、保護者のニーズの中には、知識や技術を一方的に子どもに教え込む「習い事」的な希望も少なくなく、子どもが遊びや生活を通して主体的に学ぶことを大切にする「保育」とは相容れない現実も大きな課題でした。

剣道も同様で、上達することや試合で勝つことを目標にする指導は悪いこととは言えませんが、そこに偏ると本来の武道としての剣道修練で学ぶことができる良さを潰してしまい、子どもファーストの指導ではなくなる傾向があります。

現代社会で求められるものは、変化が激しく予測不可能であり、複雑化した時代では、自ら考え、自ら行動する力が求められるのは言うまでもありません。だからこそ今、主体的で協同的な学びとしての剣道の指導が人間形成に大きな役割を果たしていると言えるのです。

新しい時代に求められる協同的な学びの剣道

私が剣道の稽古指導で大切にしている子どもの「協同的な学び」では、子どもの発達を以下の三つの段階に分けています。

①初めて剣道に出会い集団で稽古を始める時期

②上達を実感しつつ、難易度の高いものに挑戦する自己発揮の時期

③仲間同士の人間関係が深まり、互いに学び合い、大きな目標に向けて共に協力していくことができる時期

特に、この③の段階が小学生から中学生・高校生に引き継がれると考えています。私が塾長を務める初音剱志塾では稽古中に、稽古相手と相互にアドバイスを行います。相手が上級生であっても自分なりの気付きを伝えるのです。的を得ないことを言ったとしてもそれを聞いて受け入れることにしているので、気兼ねなくアドバイスできます。

また、剱志塾には成人の会員も多くいますが、稽古が終わった後の「第二道場」を楽しみにしている方も多く、そこで剣道談議に花が咲いたり、人生を語ったりするひとときを持つことにより互いに学び合う時間をつくっています。子どもたちも同じで、稽古が始まる前から賑やかな声が飛び交い、稽古が終わった後のおしゃべりタイムも大切にしています。

幼児への稽古指導

塾長を務める初音剣志塾での稽古指導

「今日の稽古で先生の面に返し胴を打てた！」とか、「明日の学校では全校朝礼でスピーチするけど、何話そうかな？」とか、子どもたちなりに「第二道場」を満喫しています。私はそれが学び合いであり、共に協力していくことができる大切な時間だと思ってます。

令和元（２０１９）年から令和５（２０２３）年までの全国高体連登録状況などをまとめた資料によると、剣道は部員数が６６４９名減少しています。それに対し、弓道は３０８１名増加しているのです。少子化の影響でどの種目も減少しているものと思っていましたがそうではありませんでした。

体育系の部活動で指導者による部員に対する暴力事件の報道がこの数年で多くなりました。剣道も人ごとではなく、暴言やハラスメントなど倫理的な問題を根絶しなければなりません。弓道の高体連登録者が増加した理由の分析は詳細にはしていませんが、やってみたいと思える魅力ある部活であることは事実です。

いずれにせよ剣道人口が激減している現実に歯止めをかけるためには、まず指導者が指導の目的を見極めなければなりません。先日、私の道場の会員が都内の剣友会へ稽古に行ったときの話をしてくれました。小学生への指導で何が気に障ったのか、そこの指導者は「この野郎！その動きはなんだ！　やる気がないならやめろ！」等々、30分以上にわたり怒鳴り続けていたのだそうです。その剣友会の子どもの中には全国レベルの結果を出す子もいるそうですが、ほとんどが高校進学前に辞めてしまうそうです。完全に指導の目的を誤ってしまっています。

協同的な学びで重要な概念は「対話」です。子ども同士の話し合いも大事ですが、指導者が子どもと対話しながら子どもが求めているものを探りつつ指導することが重要だと言えるでしょう。

保護者や地域との連携

武道としての剣道の中で、子どもたちの学びを生み出すためには、保護者や地域の資源を活かすことが大切です。保護者に稽古を見てもらうことはもちろんですが、剣道具を着ける時のお手伝いや行事などの協力を得たり、地域に出向いたりしながら、活動や学びを広げて深めています。

子どもの育ちは稽古の時間だけではありません。自分たちの課題を解決していく上で、そのテーマに詳しい保護者や専門家が地域にたくさん存在します。これからの「剣道での教育」では、学び合うコミュニティーづくりが求められると言えます。剣道の稽古で、「人間力」「生きる力」を育てていきたいですね。

世界から見る日本武道へのリスペクト

私は、岩立三郎範士のご指導を仰ぎ、ヨーロッパ剣道の指導に携わっています。行く先々の国により剣道への取り組み方に違いがありますが、共通することもあります。それは、勝利至上主義ではないことです。日本の文化としての剣道に憧れを持ち、師を尊敬すること、立ち居振る舞いや精神性に興味関心を寄せ、剣道の歴史や日本の文化に対するリスペクトをとても強く感じます。もちろん世界大会に出場するナショナルチームはありますし、競技としての剣道も強化をしています。とにかく「剣道愛」が強いのです。それはその国の指導者の影響だと断言できます。日本人の剣道指導者として訪問するのですが、剣道に取り組む姿勢や興味を持たせる指導法を逆に学ばされることが多くあります。それこそが共に学ぶコミュニティーにあるように感じます。

私が大切にしていること

私はどなたが訪ねてきても、ついお茶飲み話にお誘いしてしまいます。その方の職務の用件が終わると、お勧めの会社の概要から仕事のご苦労話、好みの食べ物や趣味の話など、とりとめのない話が続きます。その方の人柄や性格によっては話が弾む場合もあれば、反対にかみ合わないケースも時にはあります。

剣道で言えば、気分良く相手と稽古できる時もあれば、相手の年齢や経験、スピードや筋力などが違い、かみ合わない時も多々あります。その相手が成人や高校生であったり子どもであったりもします。

結論から言えば、私が心掛けているこ

とは私と稽古してよかったな、また稽古をしたいな、と思ってもらえることです。「交剣知愛」という言葉がありますが、「稽古や試合などで剣を交えて相手を知り、もう一度稽古したい、ご指導を頂きたい」という意味です。剣道のタイプが違う方、稽古の目的が自分と異なる方であっても、その気や心を感じ取り、受け入れることを大切にしています。稽古する相手と、打ったり打たれたことに一喜一憂するのではなく、稽古に臨む心意気や目的を、竹刀捌きや体捌きを通じた攻め合いの中で会話をすることが剣道の真の楽しさなのです。このエッセンスを剣道を志す幼少年から高壮年の方に伝えていきたいと思ってます。

これからも剣道の楽しさを伝えていく

相手を思いやる心

「グッドルーザー(Good loser)たれ」という言葉があります。私が高校時代に師からよく聞いた言葉です。グッドルーザーは、スポーツマンシップとともにスポーツ界に古くから伝わる信念です。裏を返すとスポーツ界では勝者への戒めの言葉はあまり見受けられません。武道、特に剣道は、勝った時の振る舞いや心構えに修練の機会を持ち合わせているところが大きなポイントです。

この6月に地元の剣道大会で初音劔志塾は団体戦で優勝し、個人戦でも学年別の優勝をほぼ独占する好成績を収めました。しかし勝つ者がいるということは負ける者がいるということです。団体戦の選手として優勝した者がいるということは選手に選ばれずに悔しい思いをしている仲間がいるということでもあります。大切なことは、共に考え・乗り越え・喜び・学び合うことです。

サステナブルな可能性の探求

私の剣道塾での取り組みと考え方を紹介してまいりましたが、そのアプローチや実践方法は多様です。プロジェクト的なものから剣道の稽古以外の行事を活かしたものもあります。固定された発想の指導から脱却し、常に進化し続けることが子どもたちにとって魅力ある剣道場になるための必須条件なのです。

子どもたちが剣道の稽古を通して、「学ぶ姿ってすごいな！」と語れるような剣道人の輪が世界に広がっていくことを願っております。

そして、サステナブル（持続可能）な剣道を楽しむことで喜びを共感しながら「生きる力」を育んでまいりましょう。